

研究雑話(156)

障害児教育・動作学誌上実習(74)

藤井力夫

姿勢反射の発達とリズム運動の習熟(54)

／開かう／と書いて／開こう／、五段活用への音韻。

前回は、「開く」を例に、動詞・活用時にみる母音交替の実際についてお話ししました。高速フーリエ解析による共鳴周波数、フォルマント第1(F1)と第2(F2)の図譜法の開

発は、動詞活用時の母音交替の必然性理解にも有益でした。五段活用では未然形・「ない」の接続に／あ／列。終止形は／う／列。連用形、用言との接続には／い／列で、カ行や

未然形・／あ／列としての側面が優先されていたことでした。

当初は、「開かむ」、意志を表す未然形：表記・「開かう」は平安時代からです。発音・読み、／ヒラコー／も、室町時代あたりからのことです。起源は、「開かむ」(図a)です。決意や志向を示す、／KAMU／の／MU／。これが変化したのです。

「開かん」と「開かう」の違い、志向であり、勧誘でもある：一つは、「開かん」です(図b-1)。／MU／の母音／U／が脱落して、／KAN／、撥音便に転じたものです。今でも、「いざ」を付ければ、可能です。他方は、／MU／の子音／M／が脱落、「開かう」がそれです。自己の志向のみならず、勧誘としての意味合いが強められています。／KAU／の／U／、共鳴周波数、フォルマント第1(F1)と第2(F2)の持続は、200ミリ秒近くです(図b-2)。／U／と／N／の違いが読み取れます。

「開かむ」から「開かう」、／お／列・五段活用への軌跡。「開きた」が「開いた」等と子音を脱落。これらは、日本語・韻律の生成を動詞表現のあり方から説明することになっています。今回は、／お／列の誕生をめぐって話したいと思います。「四段活用」とされたように、文法では、／お／列は／あ／列に属していました。

「開かう」と書いて「開こう」と読む：「開く」の志向は「開こう」です。昭和21年11月、現代かなづかいの制定までは、歴史的仮名遣いで、「開かう」と表記していました。実際の読みは「開こう」でしたので、否定・「開かない」と同じ、

／あ／と／う／の母音融合、／おー／：「開かう」と書いて、「開こう」と発音。／あ／から／う／、口腔では唇を丸くしていきます。両者の中間が／お／です。／A／と／U／の母音融合が／O／で、／A／が／O／に変わり、／U／は長音を意味し、／AU／は／O:／となります。現代かなづかいでも「開こう」と「う」を記しますが、これは長音の意味です。／HIRAKO:／(図c)。／O:／調音時の共鳴周波数、400Hz(F1)と700Hz(F2)あたり。この狭間隔が、300ミリ秒近く続いています。志向や勧誘の意志表現には、最適です。

